
愚かで無意味な殺し合い

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚かで無意味な殺し合い

【Nコード】

N3676T

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

目の前の男が許せなかった。

大切な人を殺した奴を、許せるわけが無かった。

二人の男は対峙し、殺しあう。

怒りに狂い、憎悪に身を任せ、ただ殺しあう。

それは愚かで、無意味な行為だ。

しかし男達はその殺し合いを止めはしない。

二人の男が殺しあう話です。

それ以外は何もありません。
やってみたかったので、やってみました。

一応能力者モノですが、基本的には肉弾戦です。描写がわかりにくかったらすみません。
あと、立て読み推奨。

1

「やっと、あんたを見つけた」

ボロボロの服を着た黒髪で長髪の男が言った。

「やっとだ。四年間、本当に長かった」

灰色のコートを着た、金髪の男が言った。

二人の男は、お互いに睨みあい、対峙していた。

黒髪でボロボロの服を着た男の名は、荒上リヨウ。

金髪で灰色のコートを着た男の名は、ジンIIエイヴァン。

二人は四年間、ずっと互いを探し続けていた。

殺しあう、そのために。

崩壊た世界を彷徨っていた。

はるか遠い未来。

突如、無数の隕石が飛来してきた。

その隕石は地表に激突した。それ自体は些細な事で、たいした被害も出さなかった。

しかしそれらは、謎の地殻変動を引き起こした。原因は解明されていない。しようにも、する事ができなかった。

引き起こされた地殻変動は、世界中の大陸を分断し、衝突させ、それを繰り返し、地表、海中問わず、無数の生物を死に追いやった。人間も例外ではなかった。絶え間無く起こる巨大地震。ありとあらゆる建物は崩れ去り、津波に流され、火災に巻き込まれ、その文明はほぼゼロへと巻き戻された。

だが、飛来してきた隕石がもたらしたのは、単なる死と破壊だけ

ではなかった。

稀に発見させる超能力。

それは人知を超えたものだった。

その身を自らの意思で硬化させることができる者や、自分の分身とも言える化け物を生み出す者。

人は、それらを能力者と呼んだ。

何故そんな者たちが産まれてきたかはわからない。

解明しようにも、それだけの文明を人間は持っていなかった。

そして、今。

二人の能力者が闘っていた。

あらがみ荒上リヨウは、家族と仲間を目の前の男に殺されていた。

ジン・エイヴァンは、父親を目の前の男の仲間に殺されていた。

どちらも正しくなくて、どちらも悪ではない。

どちらにも言い分があって、どちらにもそれを受け入れる事は無い。

そこにあるのは、怒りと憎しみ。

それだけが、二人の男を駆り立てていた。

これは二人の男の物語。

愚かで無意味な殺し合いを行う、二人の男の物語。

「ハハ！死ねよ、お前！」

荒上が殴りかかった。

その拳は真っ赤に燃え上がるような色をしている。周囲の空間が、歪んで見えていた。

それを、ジンは手の平で受け止める。パシッ、と渴いた音が二人の間で響いた。

「お前の能力は、俺には効かない」

ジンはそう言うのと、荒上の腹部に掌低を打ち込んだ。

「ぐ……っ」

荒上の身体は吹き飛ばされ、砂漠の大地に転がった。

その腹部にはキラキラと光る何かがあった。

巨大な氷の塊が、荒上の腹部を被っていた。

「だがそれは、お前も同じだろう？」

ジンはそう言うのとほぼ同時に、荒上の腹部から湯気が昇った。

荒上の腹部にある氷が、通常ではありえない速度で蒸発していたのだ。

「ああ、そうみたいだな」

そう言って、荒上は起き上がった。能力。

二人は、それを持っていた。

崩壊しきった世界で、人類が新たに得た、たった一つの物。

荒上は自分の体温を溶岩以上の高温にできる。

ジンは、自分とその周囲の温度を絶対零度にまで下げる事ができる。

二人の能力は正反対で、そして拮抗していた。

「一筋縄じゃないかとは思っていたが、まさか互いの能力が効か

ないなんてよ!」

荒上が走り出した。土煙が舞う。

ジンは無言で荒上に向けて手の平を向けた。

そして、空気中の水蒸気を集め、冷やし、氷の壁を作った。

いくつもあるそれは、荒上とジンの間に立ちふさがる。

「こんな小細工、意味ねえってわかってるだろうが!」

荒上が自らの能力を発動した。

両手を氷の壁にかざすと、その熱で氷の盾が一瞬で気化した。

超高温の手の平が、氷の盾を昇華したのだ。

湯気が上がる事も無い。全てが水蒸気に変わっていた。

だが荒上の視界には、ジンはいなかった。

「そんな事はわかってる」

背後から声が聞こえた。

荒上は身体を捻り、蹴りを食らわそうとする。

ジンはそれを身を屈めて避け、そのままの流れで荒上の軸足に蹴りを入れた。

荒上の体勢は崩れ、地面に倒れる。そこに、地面に手を着きそれをバネにして、荒上に向けて跳び蹴りを叩き込んだ。地面は砂漠で、砂しかない。それなのに、ジン手はしっかりと力を伝達していた。

それは、周囲の地面をマイナス273℃の冷気で固めていたからだ。荒上の身体が宙に浮かぶ。ジンはその手に砂を握り、そして能力を使った。

瞬く間にその砂が氷を纏い始め、巨大な槍となる。

「喰らえ」

ジンが槍を投げた。

「だからさあ、意味ねえよ」

荒上が呟いた。

地面に片手を付き、砂に手を飲まれながら宙に浮いた身体を支えた。

そして、飛んできた氷の槍を蹴り上げる。その氷の槍は、半分以

上が溶けていた。荒上の足に能力が込められていたからだ。超高温の熱が氷を溶かしていた。

身体を起こすと、荒上は言った。

「飛び道具は俺には通じねえ。わかってんだろ？俺とアンタの間には小細工はいらないって」

「まるで俺の事をよく知っているみたいだな」

「俺はな、アンタを倒すためにどうすればいいかずっと考えていたんだよ。皆を殺したアンタを、殺したくて殺したくてしょうがなくてな。だから、わかる。能力が拮抗しているなら、俺とアンタは殴りあうしかないってな」

荒上は拳を握った。

その拳をジンへ向けて、突き出した。

「アンタだってわかってるんだろ？だったら、こんな事する必要はねえよ」

「……確かに、その通りのようだ」

ジンが構えた。

腰を落とし、右手を突き出して、左手を腰付近に持っていく。

風が両者の間に吹いた。砂埃が舞う。二人とも、瞬きはしなかった。そうすれば、相手を見失ってしまうから。

ジンがうごいた。同時に、荒上も前に出る。

拳と掌低がぶつかり合った。

熱と冷気。その二つは拮抗し、周囲に風を引き起こす。

風が砂埃が吹き飛ばした。次の瞬間、二人は動く。

二人の男は、殴り合いを始めた。

3

五年前。

「……父さん？」

金髪の少年が銃声で目を覚ますと、目の前には父親が倒れていた。その身体からは血が流れていて、そして、全く動かなかった。遠くには、逃げ去る人影が見えた。

「父さん？」

もう一度、同じ事を言った。

目の前で起きていたことが信じられなかった。

父親が撃たれて、血を流して、そして、死んでいた。

「ねえ、父さん」

その少年は、父親を揺すった。

触れたその身体は驚くほど冷たかった。そして、さらに血が流れ出てきた。

その血が自分の身体に触れた。

それは驚くほど黒味を帯びていて、生々しい朱だった。

「あ、ああ……」

少年は腰から地面に座りこんだ。

父親から流れ出る血に、しりもちをつく。

「あああああああああああ！！」

気がつくと、少年は絶叫を上げ、啼いていた。

そして、一年後。

「なんだよ、これ」

黒髪の少年の目の前ではありえない光景が広がっていた。

全てが凍りついてた。木も、大地も、家も、人も。

凍りついた父親は、金髪の男に首を掴まれていた。

凍りついた母親は、家の前に倒れていた。

凍りついた友達らは、金髪の男の方を見てその姿勢で止まっていた。

少年だけが無事だった。自らの能力で体温を保ち、凍りつく事を防いでいたから。

「……わけわかんねえよ」

少年は呟いた。

状況が理解できなかった。

突然現れた男が引き起こしたこの状況が理解できなかった。

「おかしいだろ、こんなの」

金髪の男が、凍りついた父親の首を砕いた。

それと同時に、少年の周りの全てが砕け散る。

人の身体が裂かれているのに、血は一滴もでなかった。全てが凍っていたから。

「うわああああああああ！！」

少年は叫び、そして啼いていた。

荒上とジンは殴り合っていた。

お互いの拳を受け、避けて、そして殴る。蹴りを打ち込み、それを避け、次の攻撃へと移る。

「何でみんなを殺した！」

荒上がジンを殴りつけた。真っ赤に光る拳が、ジンの頬を捉える。

ジンは頬を押さえながら後退した。荒上はそれを追わず、言葉を続ける。

「ずっと考えていた。何でアンタが皆を殺したのかを。でもな、どうしてもわからなかったんだ。いい人たちだった。能力者だった俺を、変な力を持って産まれてきちゃった俺を、快く受け入れてくれた人たちだった。友達もいい奴ばっかでよ、そんな人たちが殺されるなんて、どうしてもわからなかった」

荒上は産まれた頃から、かなり強い能力を持っていた。

感情が高ぶると無意識のうちにそれを発動してしまった。自分の体温を高熱に変え、周囲に影響を及ぼしてしまっていた。

子供の頃、そのせいで同年代の子供や、その親、そして自らの両親を傷つけてしまったことが何度もあった。

それでも荒上の住んでいた集落の人々は荒上を避けることなく、優しく接してくれた。

同年代の子供も、嫌がることなく普通に接してくれた。

生活は貧しく、余裕があるものではなかった。

食事は少しばかりで、満足のいくものではなかった。あまり、食料が獲れるような土地ではなかった。集落ごと動かそうかと言う話さえあった。

そんな場所に住んでいても、父や母は荒上がたくさん食べれるように、少ない食事を分けてくれた。友人は自分の食料を持ってきて、みんなに分けてくれた。もちろん、荒上にも。

荒上の能力は周りに迷惑をかけてばかりで、本当なら集落を追いつけられても文句は言えないくらいなのに、それでも優しく接してくれていたみんなが、荒上は好きだった。

だから、荒上には理解できなかった。

どうして、そんな人たちが殺されたのか。

「『いい人たち』？」

ジンが怒りを顕にする。

「俺は忘れていない。五年前、あの時、あの場所で。お前の言う『いい人たち』は俺の父さんを撃ち殺したんだよ」

「お前の父さんを、殺した……？」

「そうだ。お前の仲間が父さんを殺したせいで、姉さんも死んだ。餓死でな。許せなかった。能力者だった俺のせいで、父さんも姉さんも集落を追い出されたんだ。辛かったはずなのに、そんな素振りは一切見せないで俺を育ててくれた。そんな父さんと姉さんを殺した奴らを、その仲間を、俺は殺し返してやらなかったら、気が済まないんだよ」

ジンは父と姉と共にある集落で暮らしていた。母はジンの出産後間も無く亡くなった。ろくな医療体制のないこの世界では、出産後に亡くなる事はよくあることだった。

ジンは小さい頃から能力を扱う事ができた。だが、周囲の温度を多少下げる程度の弱いものだった。能力が今のようになり強くなったのは、五年前、父を殺され、その復讐のために過酷な鍛錬を積んだからだだった。

幼かった頃のジンは、周囲に影響を与える事は殆ど無く、ほぼ一般人と変わりは無かった。

それでもジンの済んでいた集落の人々は、ジンを普通の人間と見ようとはしなかった。

ジンを恐れ、子供をジンに近づけさせないようにした。ジンの家族に嫌がらせをして、集落から出て行くように仕向けた。

そのせいで、ジンの父と姉は集落を追い出され、枯れ果てた砂漠の大地で暮らしていかなければならなくなった。

いくつかの集落に受け容れてくれるように頼んでも、ジンが能力者だと知った途端、断られてしまう。

父と姉はそんな状況でもジンのことを憎まず、育てていた。それはジンもわかっていて、いつか、きっと恩返しをしようと思っていた。

その父が殺された。銃弾で、恐らく即死だった。

そして姉が餓死で亡くなった。いつもは父が食料を調達していた。どこで調達していたのかは、教えてくれなかった。だから、父が死んで食料が手に入らなくなった。ジンがいくら探しても、どこにも

食料らしきものはみつからなかった。

「そんな事、皆がするわけがねえ！」

荒上が吼えた。その身体は淡く赤い光りに包まれていた。荒上の能力が、感情によって漏れ出しているのだ。

「なら、俺の父さんは何で死んだ？誰に撃たれた？俺はな、死に物狂いで生き延びて、やってはならないことまでして生き延びて、それでお前の仲間が父さんを撃った事を突き止めたんだよ」

「だから、みんなはそんな事、絶対にしねえ！もしやっただとしても、何か事情があったんだ！」

「……事情だって？」

ジンが地面を蹴った。高速で荒上へと接近し、間合いを詰める。その表情には憎しみと怒りが塗りたくられていた。その右手には能力と負の感情が籠っている。

「何かの事情で、俺の家族は殺されたのか」

ジンの掌低が荒上を襲う。

荒上はそれ目掛けて殴りつける。

掌低と拳が激突した。冷氣と熱氣が交じり合う。二人を中心に、異様な空気が作られる。

「人を殺していい理由があるのか？人を殺す事を納得できる言葉があるのか？あるなら教えてくれ。俺はそれが知りたい。俺の父さんと姉さんを殺すのに足りる理由を、俺に教えてくれ」

ジンはかつての事を思い出す。

辛かった。苦しかった。友達のいない、家族たった三人だけの生活は酷く辛いものだった。

でも、自分よりも父や姉の方が辛かったに違いが無かった。

二人はそんな辛い毎日の末に、殺された。唐突に、無慈悲に、理不尽に、命を奪われた。

その相手を許せなかった。仲間も全て皆殺しにしなければ、気が済まなかった。

「その言葉、そっくりそのままアンタに返してやるよ」

荒上は昔の事を思い出していた。

平和に暮らしていた。楽しく、幸せに暮らしていた。

だが、目の前の男が全てを奪っていった。

父も母も友達もその親も、全てが一瞬にして奪われた。

ただ殺された。恐らく、状況を理解する間も無く、殺された。

そんな事があっていいはずが無かった。そんな最後を迎えていいような人たちではなかった。

その相手を許せなかった。許す事など、できるはずがなかった。

「仮にアンタの言うとおりだったとして、だ」

「仮にではない。事実だ」

荒上はジンの言葉を無視して、続けた。

「じゃあよ、アンタの理屈は人を殺せるのかよ！」

荒上が無理矢理ジンの掌低を跳ね除けた。そして、左足を軸に身体を回転させる。回し蹴りだ。

ジンはそれに反応し、氷の壁を間に造った。だがそれは荒上の熱と蹴りの威力には敵わず、碎かれる。

ジン身体が横へと飛んだ。蹴られた衝撃を腹部に感じ、ジンは地面へと落ちていく。

砂埃が上がる。お互いの姿はそれに遮られ、確認できない。それでも荒上は迷うことなくその中へ飛び込んで行った。

「理屈ならあるさ」

土煙の中から一本の腕が伸びてきた。

荒上はそれに反応しきれず、首を掴まれてしまう。そして、その腕は荒上の身体を宙へと浮かべた。

土煙が晴れると、そこには荒上を吊るすジンの姿があった。

「が……っ」

荒上の首を掴む手に力が込められる。

気管が閉まり、呼吸が困難になる。酸素が身体に回らなくなり、苦しさが荒上を襲う。

身体を暴れさせ、荒上は拘束から逃れようとする。しかし、それが解ける気配は無い。

「教えてくれ。どうして父さんと姉さんは殺された？ どうして二人が死ななければならなかった？ 貴様らには人の命を自由に奪う権利があるのか？」

ジンは誰かに向けてその言葉を発している訳ではなかった。

目の前の男に疑問を投げかけているようで、実はそうではない。

自らの憤怒と憎悪が口から漏れ出して、辛うじて言葉になっていた。それだけのことだった。

「そんなはずが無い。そんな事が許されるはずが無い。だから俺は貴様らを殺すんだ。ああ、そうだ。貴様らは全員、殺して、殺して、殺して、殺して！」

首を握り締める手にさらに力が加えられた。

荒上の身体は酸素を求め、心臓をポンプする。

しかし、新しい酸素は身体に入ってこない。

「そうしなければ二人の魂は救われない。二人は安らかに眠れない。貴様らは全員殺さなければいけないんだ。だから、死ね！」

ジンが叫んだ。その表情は怒りと憎しみに塗りたくられていて、

それでいて口元は不気味に笑っていた。

「嫌……だね……」

荒上が擦れるような声で言った。

そして首に食い込むジンの指を両手で掴むと、それを無理矢理引き剥がそうとした。

ジンはそれに真っ向から抵抗する。だがその拘束は徐々に解かれていった。

「う……お……おおお!!」

「くっ!」

ジンの手が荒上の首から離れた。それと同時に、ジンの掌低が荒上に襲い掛かる。

荒上はそれを腕を交差させて受けた。荒上の両腕が、その威力を分散させる。

だが勢いは止められず、荒上の身体は後ろへと飛ばされた。

「アンタの言ってる事、全然理解できねえよ」

砂の大地に着地した荒上が言った。

威力を分散させたとはいえ、首を絞めと掌低のダメージはあった。だが無いような素振りをしている。

「皆は人殺しなんて絶対にしてねえし、アンタの理屈が正しいとは思えねえ」

「なら貴様にはそれがあるのか? 俺を殺したくてしょうがない貴様に、俺を殺すだけの理屈があるのか?」

その言葉を聞くと、荒上は笑った。

笑い声が砂漠の大地に響く。

「何がおかしい」

「お前は理不尽に対しても理由がいたとしても思ってたのかよ!」

荒上がジンに殴りかかった。

「俺に理屈を要求して、貴様は理屈を持たないのか」

ジンはそれを避け、蹴りを放つ。

「ハッ! 俺はお前が憎くて憎くてしょうがないんだ。それで十分だ

ろうが！」

腹部に蹴りを受け、後ろに下がりがながらも、荒上は前進する。

荒上の拳がジンの胸部を捉えた。それと同時に、ジンは荒上に膝蹴りを喰らわせる。

「やはり貴様は、貴様らは、狂っている！」

膝蹴りで怯んだ荒上に、ジンは冷気を纏った掌低を叩き込んだ。いくつもの衝撃が荒上を襲う。

「それはアンタもだろう！」

それでも荒上は止まらない。ジンの能力にやられてしまぬように全身に能力を纏わせ、進む。

ジンの掌低を掴むと、それを引き寄せ、ジンの顎を殴りつけた。

「ぐあっ！」

顎を殴られると脳が揺れる。脳が揺れるとめまいのような感覚に襲われてしまう。

それはジンも例外ではなく、無防備な姿を荒上に晒す事になった。荒上はその隙にジンを殴った。

「うおおあああ！」

溶岩すら超える高熱を纏わせた拳がジンの顔面を何度も殴りつける。

それでもジンの顔が高熱にやられずに溶けないでいたのは、ジンが無意識のうちに能力を発動させていたからだろう。

「くっ……調子に、乗るな！」

めまいでふらつきながらも、ジンは荒上の拳を止めた。そして、今度はジンが荒上を引き寄せる。

そしてジンの掌低が荒上の胸部に命中する。その場所に氷がまわり付いていく。

「アンタこそ！」

荒上はその氷を能力を使って溶かした。胸部の痛みには耐えながら、ジンに肘うちを喰らわす。

ジンの鳩尾みおちに肘が入る。悶えてしまいそうなほどの痛みが、ジンの身体を駆け抜けた。

それでもジンは耐える。今すぐにも蹲ってしまいそうな身体を、無理矢理に動かす。

荒上の胸部に再び掌低を入れた。同じ場所に氷がまとわり付く。

「意味ねえよ！」

荒上の能力がすぐさまそれを溶かした。一瞬で昇華される。

襲い掛かる拳を避け、時には受け、時には喰らいながらジンは同じ場所に何度も掌低を打ち込む。

そのたびに荒上の能力がそれを溶かしていく。

荒上の拳はジンの身体を何度も殴りつける。

常人ならば一瞬で凍り付いてしまう掌低を喰らいながらも、真っ赤に燃えるその拳で殴りつける。

「が……っ」

荒上が咳き込むように血を吐いた。何度も絶対零度を纏った掌低が打ち込まれたその胸には、巨大な氷が覆いかぶさっていた。

荒上に一瞬の隙ができる。その隙をジンは見逃さなかった。

氷の覆いかぶさる胸部にさらに打撃を加えた。荒上は反撃する事ができず、されるがままの状態になってしまう。

一気に畳み掛ける。全ての一撃に全力を注ぎ、荒上の身体を打ちのめす。

「これで！」

ジンが蹴りを喰らわせた。荒上の身体が後方へと飛んでいく。ジンはそれを追うために、足を踏み出した。

だが次の一步が踏み出せない。ジンの足は、地面を蹴ることなく、大地に膝を着いてしまった。

その間に小さなうめき声を上げながら、荒上の身体が地面へと落

ちていく。

ジンはそれに向かって走り出そうとするが、身体が言う事を聞かない。

足だけではない。頭もまだふらつく感覚が残っていた。鳩尾の痛みもまだ消えていない。

「これは……」

「辛いのはお互い様か」

荒上が起き上がった。口からは血が流れ出ている。

胸部の氷は溶けていた。能力で溶かしていたのだろう。だが、荒上の胸部にはそれとは関係のない激痛が残っていた。

ジンの服は焼け焦げた跡がいくつもあった。身体はそのようなものが無い代わりに、痣が何箇所もできている。

荒上とジンにはお互いの能力はあまり利かない。

通常ならば、荒上が殴れば相手の身体は融解し、ジンが能力を使えば相手は一瞬で凍りつく。

しかし、二人の間ではお互いの能力が拮抗していて、対した影響は出ない。

荒上の身体には何度かジンの能力によって、氷が付着していた。

だが、それは荒上の身体にダメージを与えてはいなかった。荒上とジンの能力が拮抗していて、服に付着する事はあっても、荒上の身体にまで能力が干渉してくることはないからだ。

しかし、単なる打撃なら話は別だ。

能力が拮抗しているようが互いに干渉し合おうが、殴られたり蹴られたりすれば、身体はダメージを受ける。

現に荒上の肋骨は度重なる打撃によって折れていたし、ジンは何度も殴られた結果、全身に打撲や裂傷ができていた。

それでも二人は殺し合いをやめない。

やめることなど、二人にはできるわけが無かった。

ずっと、そのためにだけに生きてきた。

全てを無くし、ただそのためにだけに生きてきた。

そのためならば、死んでも構わなかった。

二人にとって、この愚かで無意味な殺し合いはそれだけの意味を持っていた。

――痛てえな、クソったれ。

荒上は胸を押さえた。

折れた肋骨は内臓を傷つけていた。喉から血がこみ上げてくる。

荒上はそれを吐き捨てると、言った。

「アンタは殺す。何があっても殺してやる」

荒上が前に出た。

ゆっくりと、一歩ずつ、だが確実に。

足を踏み出すたびに痛みが押し寄せてくる。

――痛てえし辛えし苦しいけどよ、こいつだけは殺さなきゃならねえんだよ。

荒上は拳を握り締めた。ジンを睨みつけ、そして思う。

――そう誓ったんだ。そうすると決めたんだ。だから殺さなきゃならねえんだ。

四年前、目の前で全てが奪われた時。

その時も荒上はジンと闘った。

だが敵わなかった。全くと言っていいほど、手も足も出なかった。殺される。

氷を操る男を前にして、本能がそう告げていた。

気がつくと荒上は逃げ出していた。

全てを奪った男に背を向け、一心不乱に駆け出していた。

その時、どうやって逃げ延びたかを荒上は覚えていない。
気がつくとも廃墟の角で息を潜めて身を隠している自分がいた。
そして、荒上は知ってしまう。

恐怖に駆られ、ただ生き延びたい一心で逃げだした自分を。
父親を殺された怒りも、母親を殺された憎しみも、全てを奪われた悲しみも、死という恐怖の前に一瞬で霞んでしまった自分を。
敵を目の前にして、逃げ出してしまった自分を。

そんな自分が許せなかった。死の恐怖に怯えて逃げ出した自分が、
どうしても許せなかった。

——もうあんな思いは沢山なんだよ。どんなに痛くても苦しくても辛くても、こいつだけは今ここで俺が殺すんだ！

逃げ延び、安堵し、そして襲ってきた怒り。

その対象は他の誰でもない、自分。

敵を目の前にして逃げ出した自分が、憎くて憎くてしょうがなかった。

だがら決めた。目の前で全てを奪った男を殺すことを。

そうしなければ、自分が許せなかった。そうしないで生きる事など、荒上にはできなかった。

動くたびに胸が痛む。呼吸をするたびに胸に何かが刺さる感覚がある。

それでも荒上は前に進む。

目の前の男を殺すために。

「死ぬのは貴様だ。俺が殺す。殺してやる」

ジンが言った。そして前へと足を踏み出す。気を抜けば直ぐにでも地面に倒れてしまいそうだった。意識は朦朧とし、全身に痛みが走る。

それでもジンは歩く。

——間違っているんだろう、俺は。

ジンは自分の行いが正しいとは思っていないかった。そう思えるわけがなかった。

父親を殺され、姉を失った。だから、大切な人が目の前から消えてしまう悲しみはよく知っている。

知っていながら、自分が誰かの大切な人を殺す。そんな事が正しいわけが無かった。

——だが、俺の父さんは殺されたんだ。姉さんが死んだんだ。

だから、殺す。

自分から全てを奪った者達から全てを奪う。

正しいだとか間違いだとか、そんな事はどうでもよかった。

——それに、俺は……

五年前、父親が殺された後。

父親がいなくなり食料が手に入らなくなった、ジンと姉は、衰弱しきっていた。

辺りをいくら探しても食料は見つからない。父親がどうやって食料を調達していたのか、ジンも姉も知らなかった。

食料の調達を手伝おうとした事は何度かあった。だが、そのたびに父親はそれを断っていた。

だから二人とも、何所に行けばどうすれば食料が手に入るのか知らなかった。

そして何日も食事を採らない時間が続いた。

身体が少しずつ萎縮していくような感覚がジンを襲った。

飢えも渴きも限界に達し、死が目の前に迫ってきていた。

このままだったら死ぬ。そう確信した時、ジンの目の前にあるものが映った。

父親の死体だった。

生き延びたかった。それ以外はどうでもよかった。

それが何だろうが、自分が生き残れるのならどうだってよかった。たとえ、父親の肉だとしても。

必死に止める姉の言葉を見殺し、ジンは半ば腐りかけていたそれを喰っていた。

何も思わず、何も感じず、ただ生き残るために、父親の肉を喰ら

った。

——そこまでして生き延びて、何も清算せずにのうのうと生きていくなど、できるわけがない。

それは言い訳と言われればそれまでの事だった。何があっても人殺しは肯定されるものではないし、ジンもそれをわかっている。

わかっているが、それでもジンは目の前の男を殺そうとする。全てを理解して、殺そうとしている。

——そのためなら何だってしてやる。身体が壊れようが魂が朽ち果てようが、俺はこの男を殺してやる！

朦朧とする意識と絶え間なく続く痛みの中で、ジンは歩く。

目の前の男を殺すために。ただそれだけのために。

「ああ、そうだ」

荒上が呟く。

「この男だけは」

ジンが呟いた。

「そう、決めたんだ」

荒上が拳に熱を宿らせる。

周囲の空気が歪む。拳が赤く染め上がる。地面も赤くなっていた。

「俺の、この手で」

ジンがその手に絶対零度を纏わせる。

周囲の全てが凍り始める。地面に氷が這うようにして広がっていく。

二人が互いの間合いに入った。

「殺す！」

荒上が拳を振るった。

それはジンの胸部を捉えた。ジンの身体はよろめき、後ろへと数歩、後退する。

「殺してやる！」

ジンが掌低を打ち込んだ。

荒上はそれを二の腕で受ける。途端、胸部に激痛が走った。血が

再び口から吐き出される。

砂の大地に血が滴り落ちる。荒い呼吸が周囲に響いた。

「があああああつああ!!」

声にならない声を上げて、荒上がジンの頬を殴った。

ジンの脳が揺れる。なんとか地面に倒れはしなかったが、視界の揺れはさらに酷くなった。

血が音を立てて頭を打ち付けている感覚がジンを襲った。足がふら付き、体勢を崩す。

だが倒れない。もう、ジンを動かしているのは意識でなかった。目の前の男を殺す。

それだけだった。

「あああああつああ!!」

ジンはふらつきながら荒上の胸部を殴った。

荒上の口から血と擦れた声が漏れた。

ジンはさらに掌低を打ち込む。何度も、何度も、何度も。

「ぐ……らあああああ!!」

身体がねじ切れるような痛みに耐えて、荒上はジンの胸倉を掴んだ。

荒上もまた、意識で動いてはいなかった。

あるのはただ、目の前の男に対する憎しみ。

かつての自分に対する怒り。

荒上は掴んだ胸倉を引き寄せ、地面に倒す。ジンはそれに逆らう事ができなかった。ふらついてる足はもう限界だった。

荒上は倒れたジンに馬乗りになり、殴りつけた。

「死ね! 死ね! 死ね!」

口から血を吐き出しながら叫び、何度もジンの顔面を殴打した。血がジンの顔にかかり、荒上がジンの顔を殴り、荒上の手にその血が付着する。そしてその瞬間に血は蒸発していく。

今にも失せてしまいそうな意識の中、ジンは荒上の腕を掴んだ。それを横に引っ張り、荒上を自らの身体から退かす。

荒上の身体は地面を転がった。その衝撃で、荒上の胸部に激痛が走る。

ジンはよろけながら身体を起こすと、コートの中から拳銃を取り出した。

それを倒れている荒上に向け、引き金を引く。

銃声が鳴った。

弾丸が荒上へと向かっていく。

だが、それは荒上を傷つける事はできなかった。

荒上の全身を被う高熱が弾丸を着弾する前に、それを液体に、そして気体に変えていた。

「なら……っ！」

ジンが再び引き金を引いた。

弾丸が撃ち出される。ジンはその衝撃に顔をしかめた。視界が歪み全身が痛むジンには、銃の反動もきつかった。

弾丸が着弾し、荒上の身体が痙攣するように撥ねた。弾丸を打ち込まれた肩を中心として、氷が荒上の身体に広がっていく。

ジンは弾丸に能力を籠めていた。超低温を纏ったそれは荒上の高温に溶かされること無く、原型を留めたまま目標へ着弾したのだ。

「があっ！」

荒上が叫ぶ。それと同時に肩に広がっていた氷が消えうせた。

そして、荒上は肩を手で押さえ、自らの熱で傷を焼いた。

流れてでいた血が一瞬で蒸発し、傷口が塞がっていく。だがそれは治癒ではなく、ただ焼いただけに過ぎない。

血は出なくなったが、痛みは依然として続いていた。弾丸も体内に入ったままだ。

「クソ……ったれ……!」

荒上は立ち上がった。今にも倒れそうな足取りでジンへ接近していく。

ジンは荒上の心臓へと拳銃を向けた。それとほぼ同時に、荒上が銃身を握る。

高熱が拳銃へ伝導していく。銃口が捻じ曲げられ、それは弾丸を撃ち出せなくなっていた。

ジンは引き金を引く代わりに荒上の頬を殴った。荒上の身体が横へと流れ、地面に倒れこみそうになる。

なんとか荒上は踏みとどまった。そして、腰辺りからナイフを取り出し、それをジンへと突き刺した。

だがそれはジンの造った氷の壁に阻まれた。能力を使ってそれを溶かしたが、その時はすでにジンは荒上の間合いから一步離れていた。

ナイフが空を切る。やり場を失った力が、荒上の身体を地面へと向けてしまう。

足を一步前に出し、倒れそうになる身体を支えた。動きが止まる。その隙に、ジンの蹴りが荒上の胸部を捕らえた。

荒上の身体が上へと跳ね上げられる。

「がっ……あっ……」

肋骨がさらに折れた。

身体が引き裂かれ、ねじ切られ、何度も切り刻まれたかのような痛みが荒上の身体を駆け抜けた。

それでも荒上は痛みに耐えて、その手に持つナイフをジンへと突き立てた。

再び氷の壁が立ちふさがる。が、今度は防がれることなく、ナイフはジンの身体へと向かっていく。

氷が精製される前から能力を発動させていたからだ。氷ができた瞬間に、それは溶けていた。

「く……っ」

ジンは全力で能力を発動した。

物体は、絶対零度に近い極度の低温になると脆くなる。

それは金属も同様で、限りなく冷やす事ができれば、それは脆く崩れやすくなる。

例えば砂を手で固めて投げても何かにぶつかれば直ぐに崩れてしまうように、極限までに冷却をすれば、金属も衝突の衝撃で崩れるようになる。分子間の結合力が弱まるからだ。

だから、普通ならばその刃はジンを傷つける事はできない。だが、ナイフはジンの右肩へと深く突き刺さった。

理由は単純だ。十分に冷却されていなかったからだ。

荒上の体温がナイフに伝わり、それが高温となっていたと言うのも理由の一つだ。

だがそれ以上に、ジンの能力が弱まっているのが原因だった。

ジンの肉が裂かれ、血が噴出す。ジンはその部位を能力で冷却し、凍りつかせようとした。

しかしナイフに残っている熱とジンの能力が弱まっているせいで、直ぐに凍りつかせる事ができない。

もう、限界だった。

度重なる打撃。

揺れている視界。

全身を襲う痛み。

もはや、まともな思考はできなくなっていた。

能力は減退し、本来の力から少しずつ弱まっていく。全力を出しても、それは本来の力には遠く及ばない。

だがそれは、荒上も同じだった。

撃たれた肩が痛む。蹴られた胸部が張り裂けそうになる。

全身からは熱が少しずつ抜けていく。

ナイフを突き刺した時、それが能力の限界だった。

二人の荒い呼吸が聞こえてくる。

それ以外の音は無い。二人の周囲には何も無い。

ただ砂漠が広がっているだけ。そこで血まみれで傷だらけの二人の男が対峙している。

もう倒れたい。全身の力を抜いて、大地に倒れてしまいたい。もう逃げてしまいたい。苦痛から、この状況から、逃げだしてしまいたい。

二人の身体はそう告げていた。それでも二人が立っていた。

——もう逃げねえ。逃げ出したりしねえ。そうだ、俺はこいつを殺すんだ！

荒上が心の中で叫ぶ。

絶え間なく襲ってくる激痛をかき消すように。

——殺す。父さんを殺して姉さんを死なせた奴らは、全て、殺す！それは執念だった。

意識も思考も消えかかっている中で、それはジンの頭の中で強く響いていた。

「うるあああああああ！！」

荒上が殴りかかる。

「あああああああああ！！」

ジンが掌低を打ち込もうとする。

二人はもうその身体に能力を纏わせていなかった。

そんな余裕はなかった。

限界を向かえ、能力が使えなくなり、それも二人は闘う。

殴り合って、蹴り合って、どちらかが命尽き果てるまで殺し合う。

互いの一撃が互いに入った。

荒上の拳がジンの頬に。ジンの掌低が荒上の胸に。

二人の血が砂漠の大地に飛び散った。

それでも二人は倒れない。

目の前の男を殺すために。それだけのために。

消えようとする意識を何とか保ち、そして二人は再び殺し合った。

五年前。

全てが始まった、あの日。

砂漠に無数の岩の転がる場所に、四人の男達がいた。

「その食料を置いていってくれ」

一人の男が拳銃を握っていた。

「あんただな。最近この辺りで食料を奪って回っているってのは」
獣の死体を抱えた男が言った。その他にも、二人の男が獣を抱えている男のそばにいる。

三人は食料となる獣を捕らえ、集落へと帰る途中だった。

その時、目の前に拳銃を持った男が現れた。追いはぎ、というやつだ。

「自分が何やってんのかわかってるのか？この辺りは食料が限られてる。その限られた食料を奪われたら、下手したら食い物が無くなって死にじまう奴だってでてくる」

拳銃に臆する様子は無い。説得するような口調で喋っていた。

「そんな事は聞いていない。黙って、食料だけ置いていってくれればいい」

拳銃を構えた男には子供がいた。

能力者の少年が一人、そしてその姉が一人。

子供が能力者だという理由で集落を追われ、この土地にやってきた。だが、この土地は食料が限りなく少ない。土地勘が無ければ、食料を得る事ができない。

だから、男は周囲の集落の人々に頭を下げなんとか仲間に入れて

もらおうとした。それが敵わないなら、食料を分けてもらおうとした。

だが、それは全て断られた。最初は快く承諾してくれた。けれど、息子が能力者だとわかった途端、皆、それを拒みだしたのだ。

能力者は嫌われ者だ。その人格がどんなによかろうと、殆どの能力者が普通の人にはない、人を殺せるだけの力を持っている。今はまだそれだけの力が無くとも、いずれはそれだけの能力に成長するかもしれない。

そんな人間が同じ生活を送る仲間となるのを、殆どの人間が我慢できない。だから、男の家族は集落を追われ、新しい土地でも仲間に加われず、食料すら分けてもらえない。

土地勘のない男が子供たちに食わせていくには、追いはぎをするしかなかった。そうしていかなければ、まずこの辺り一帯の土地から出て行くだけの体力も得られない。

「何か事情があるなら教えてくれないか。もしそれがあるなら、全ては無理だがいくらかは置いていってもいい。なんなら、俺達の集落の仲間にならないか？」

獣を抱えた男が言った。

「荒上、それは」

「俺たちだけでギリギリなんだ。それなのに」

二人の男が反論する。だが荒上と呼ばれた男は、静かにこう言った。

「だが、見過ごすわけにもいかないだろう」

男には一人の息子がいた。

その息子は能力者で、そのせいで周囲に迷惑ばかりをかけていた。だが、仲間達はその息子を受け入れてくれて、普通の人間と同じように接してくれている。

だからこそ、目の前で拳銃を突きつける男を見過ごせなかった。

自分の息子は仲間たちに助けられている。

だから、自分も困っている人がいるのなら助けたい。

それは拳銃を突きつけてくる男に対しても例外ではなかった。

「折角で悪いが、申し出は断らせてもらう。欲しいのはその食料だけだ。他には何もいらない」

能力者というだけで世間から追放された息子を持つ男にとって、その申し出は受け容れられるものではなかった。

きつと、息子が能力者だとわかってしまったら、この男達も自分達を追放するのだろう。その考えが拳銃を握る男の中にはあった。

それは当然の事と言えた。男の息子は何もしていないのだ。能力で誰かを傷つけた事も、能力で何かを破壊した事も無かった。それなのに拒まれる。能力者だという理由で。

「この銃は本物だ。できれば撃ちたくは無い。早くそれを置いて何処かへ行ってくれ」

それを聞いた三人の男は、小声で話していた。

「三人で抑えよう」

「拳銃さえ取り上げればいいんだしな」

「そうしたら、集落に連れて行こう。無理矢理にでも仲間にする」

「……わかったよ。荒上」

「確かに、見過ごすわけにもいわないしな」

男は三人が小声で会話するのを見て、苛立たしげに舌打ちをする。

「早くしろ。撃つぞ」

引き金に掛かっている指に力が籠る。

「いくぞ！」

荒上と呼ばれている男が叫んだ。

その瞬間、三人の男が一齐に拳銃を持った男に飛び掛った。

男が引き金を引いた。

荒上という男が腹部に弾丸を受けた。うめき声が聞こえてくる。

残った二人の男はそれでも止まらず、拳銃を持った男を押さえに行った。

先程の小声の会話で決めていた事なのだろう。

誰かが弾丸を受け、残りの二人は男を抑える。拳銃を持った男

の口調から、即死になるであろう場所を狙ってこないのは想像できた。

荒上という男が声を上げたのは、自分が的となるためだ。

「は、放せ！」

拳銃を持った男が暴れた。

身体を押さえつけられながらも、拳銃を振り回し、男たちをそのグリップで殴打する。

「大人しくしてろ！」

男から拳銃を奪うために、その手を捻った。

手首は折れ曲がり、銃口が押さえられている男へと向く。

そして、銃声が鳴った。

それは事故だった。

男の指が偶然、トリガーを引いてしまったのだ。

打ち出された弾丸は男の心臓を貫いた。

二人の男は困惑していた。

殺すつもりは無かった。ただ抑えて、拳銃を取り上げて、それだけのつもりだった。

なのに。

死体からは血が流れ続けている。とどまる様子は無い。

「あ、荒上が」

男が言った。そして、倒れているもう一人の男へ視線を向ける。

「そうか。そうだ。このままだったら荒上が危ない」

自分自身に言い聞かせるように、もう一人の男が言った。

荒上と呼ばれている男からも血は出ていた。致命傷ではない。しかし、放っておけば出血多量で死んでしまうだろう。

「集落に帰ろう。荒上を治療しなくちゃ」

「ああ、そうだな……」

二人の男はそう言うと、荒上の身体と獲物を二人で抱え、その場から去った。

それは誰かが死んだという現実を受け容れないための、逃避だった。

そして。

「父さん……?」

金髪の少年が、目を覚ました。

この物語は最初から間違っていたのだ。

手を取り合えたはずなのに。

殺されなくてよかったはずなのに。

死なくてよかったはずなのに。

殺し合いなんてしなくてよかったはずなのに。

間違ってしまった。

必然と偶然が折り重なって、こうなってしまった。

二人の男に事の始まりを知るすべは無い。

だから二人は止まらない。

もし真相を知ったとしても、ジンも荒上も止まりはしないだろう。

——もう、俺もコイツも限界か……

荒上はふらつく身体を何とか支え、立っていた。

胸部の痛みはさらに酷くなっている。身体からは血が抜けて、意識が朦朧としている。

拳の感覚はもう無かった。殴り合いに耐え切れず、損傷していた。

皮が何箇所も剥げ、肉が見ていた。

肩が撃たれた方の腕は動かせなくなっていた。ただ、痛みだけは続いていた。肩の中に何か、異物が入っている感覚もある。

もう指を動かす事すら辛い。呼吸すら苦痛を伴う。ただ立っているだけで、気が狂いそうなほどの痛みが押し寄せてくる。

——それでもさあ、やるって決めたんだよな。俺は。

荒上は前に進む。

全身が悲鳴を上げようと、どんな苦痛が押し寄せようと、荒上は前に進む。

——死にたくねえなあ。畜生。

肋骨が折れている。

内臓は何箇所も損傷している。

血が圧倒的に身体に足りていない。

これ以上闘えば、闘わなくとも時が来れば、死ぬ。

それがわかっていた。

——でもさ、こいつだけは殺さなきゃならねえんだ。そのために俺は生きてきたんだ。だからよ……

目の前には父親を殺し、母親を殺し、仲間を殺し、荒上から全てを奪った男がいた。

その男に復讐を遂げないで生きていくなど、できるわけがなかった。

それができなかった昔の自分を、荒上は許せなかった。

逃げた自分。全てを奪われたのに、死の恐怖に負けた自分。

そんな自分が許せなかった。敵もとれず、ただ生き延びた事に安堵していた自分が。

だから、荒上は前に進む。

死の恐怖はある。だが、それをねじ伏せて、闘う。

——ああ、そうだ。ここで逃げて生き延びたって、そんな命、ゴミクズ以下だ！

全ては目の前の男を殺すために。

それだけのために。

——もう、死んでいてもおかしくないはずだが。

ジンの視界は霞み、揺れていた。脳震盪が収まらない。

それは単に打撃を受け続けたからだけではなかった。

ジンは脳内出血を起こしていた。死ぬのは時間の問題だ。

そんな事がジンにわかるはずが無い。ただ、直感的に思っていただけだった。

——まあ、いいさ。そんな事は。俺のすることは、一つだけだ。

ジンは全身の痛みに耐え、足を踏み出す。

その足はふらついていた。真っ直ぐ歩く事は、もうできなくなっていた。

歩くたびに頭が内側から何かに叩かれ、右肩が裂かれるような痛みを感じる。

顔面は赤と青と紫の入り混じった、奇妙な色に晴れ上がっていた。傷口からは血が垂れている。

歩けるような状態ではなかった。ジンが思っていた通り、もう死んでいるはずの身体だった。

それでも生きているのはジンの奥底にある執念のなせる業だった。
——殺すんだ。父さんと姉さんをあんな目に追わせた奴らは、その仲間は、全て。

その為だけに生きてきた。

父親の肉を喰らい。

姉の肉を喰らい。

死に物狂いで生き残り。

そして、殺した。怒りで増幅した能力によって、驚くほどあっさり復讐を遂げた。

だが、目の前の男だけは違かった。能力が利かず、ジンの前から逃げ出した。

しかし、今、その男は瀕死だ。あと少しで、死ぬだろう。

そのことを考えれば、迫ってくる死などどうでもよかった。

それに、もとよりジンは自分の命などどうでもいいと思っていた。

——この身は朽ちても構わない。復讐を遂げるために、俺は生き延びたんだ。だから……

そのためだけの生だった。

それ以外は何もいらなかった。

復讐さえとげられれば、それでよかった。

——この男は俺が殺す。そうだ。そのためなら死んでも構わない！
その為だけにジンは歩く。

限界を超え、前に歩く。

お互いの息遣いが聞こえてくる。

荒い呼吸。滴り落ちる血。相手の心臓の鼓動さえも、手に取るようにわかる。

頭はぼうつとしているのに、感覚だけが研ぎ澄まされる。

——さあ、いくぜ。

——これが、最後だ。

心の中で声を交わす。

憎い敵のはずなのに。殺したくてたまらない相手のはずなのに。

何故か、殺し合いが最後を迎える問い事が惜しく感じた。

目の前の男を殺すためだけに生きてきたというのに。

二人とも、その感情が理解できなかった。

目の前の男に対する感情が消えたわけではない。

目の前の男が死ぬのを望んでいるのは今でも変わらない。

ただ、この闘いが終わるのが、たまらなく寂しかった。

——わけわかんねえな、おい。

——全く、理解できない。

二人は殴りあう。

全身全霊を駆けて、殴りあう。

もう限界はとっくの昔に迎えている。

それでも闘う。

目の前の男が立ち上がるから。

だから自分も立ち上がり、そして、殺し合う。

——でもさ、あんたは殺すぜ。

いつの間にか、心の底からこの殺し合いを楽しんでいる自分がいたことに、荒上は気が付く。

だが、それでも目の前の男は殺さなければならなかった。

目の前の男は荒上の全てを奪った男だった。

だから殺さなければならぬ。

そう誓ったからには、そうしなければならぬ。

——アンタは殺す！俺は必ずアンタを殺してやるんだよ！

荒上は拳を振りかぶった。

ジンはそれをもろに受け、数歩、足が後ろに下がった。

——だが、それでもだ。

この殺し合いが終わる。それは、復讐の完遂を意味する。

その為だけに生きてきた。それ以外に生きている理由は無かった。父を喰った。姉を救えなかった。そんな自分に、復讐以外で生きる価値は無かった。

だからこの殺し合いに何かたまらない高揚感を感じていようと、そんな事はどうでもよかった。

——俺は貴様を殺す！俺のこの手で殺してやる！

ジンは掌低を荒上へ打ち込んだ。

荒上の足が数歩下がる。

ジンはそれを追わない。

正確には、追えない。

荒上が掌低に耐えられないように、ジンも荒上の拳に耐えられなかった。

もう足が動かないのだ。気力だけで動かしているが、それにも限界はある。

限界を超えても、それでもたどり着く限界はある。

——次だな。

——次で決まる。

二人は直感的にお互いの考えを感じ取った。

正真正銘の限界。

生命の尽きるその瞬間。

それはもう、直ぐそこだった。

二人の男は最後の力を振り絞る。
気力も、体力も、全てを振り絞る。

全ての力をかき集め、荒上は右手に高熱を宿した。
その命を賭して、ジンは左手に絶対零度を纏わせる。

「ああああああああ！！」

「はああああああああ！！」

溶岩すら超える、超高温の拳。

全てを凍て尽くす、絶対零度の掌低。

二つは真っ向から衝突した。

二人の間に衝撃が駆け抜ける。

痛みも苦しみも全てを押さえ込んで、二人は全力を籠める。

「が……っ」

荒上の口から血が吐き出された。苦痛で拳に集めた能力が逃げていく。

超高温が絶対零度に押されていく。

——でもよ、退くわけにはいかねえんだよ！

それは意地だった。全てを奪った男と、かつての弱かった自分に
対する意地。

荒上は逃げていく能力をなんとか掻き集め、それを押し返した。

「う……っ」

ジンの頭が揺れた。脳内出血が死ぬ一歩手前にまで広がっていた。
意識が遠のき、絶対零度が弱まっていく。

ジンの掌低が荒上の拳に圧倒されそうになる。

——ここで負けるわけには、いかない！

それは執念だった。全てを奪われた悲しみと、全てを奪われた怒
りの執念。

絶対零度の掌低が超高温の拳を押し戻す。

二人の力と能力は再び拮抗した。

「があらあああああああ!!」

「うぐああああああああ!!」

そして。

荒上の拳が、ジンの掌低を弾き飛ばした。

「あっ……ぐっ……」

ジンの左手が無くなっていた。荒上の能力によって、一瞬でそれは溶かされていた。

「こいつで、終わりだあああああ!!」

荒上が叫ぶ。

荒上の超高温の拳が、ジンの左胸へと命中した。

「ぐあっ!」

それはジンの皮膚を溶かし、血を昇華させ、骨を貫通する。

そして、荒上の拳が、ジンの心臓を貫いた。

——心臓をやった。これで……!!

荒上が勝利を確信した時。

ジンは歪んだ笑顔で笑っていた。

心臓を貫かれ、今にも死ぬという、その状況で。

荒上は自分の腹部に何かが当たっていることに気がつく。

それは、銃口の拉^{ひし}げた拳銃だった。

——しま……っ

ジンが引き金を引いた。

弾丸は折れ曲がった銃口に阻まれ、そして暴発する。

それはジンの右手と荒上の腹部を吹っ飛ばした。

「が……あ……は……っ」

それは能力を使い果たした荒上にとって、致命的な傷だった。

呼吸ができない。全身に血が回らない。
心臓がなくなったのだから、当然だ。

——ああ、これで、やっと死ねる……

ジンの心は晴れやかだった。

どうしても遂げたい復讐だった。

間違っているのはわかっていた。

無意味な事はわかっていた。

けれども、そうせずにはいられなかった。

——父さん……姉さん……

ジンの目にはかつて失った、大切な人が映っていた。

それはただの幻覚なのか。それとも、神が許した束の間の再開なのか。

——俺、天国そっちにいけそうにないよ……ごめん……

ジンの目に映る二人は泣いていた。

きっと、自分が何をしたのか、全て知っているからだ。

ジンはそう感じた。

人を憎み、人を殺し、人に殺される。

そんな人生を、二人が喜ぶわけが無かった。

それでも、とジンは思う。

——間違った道だけど……俺……後悔はしてないから……

自分は死ぬ。それは当然の事だ。

何人もの人の命を奪った。復讐という理由で、やってはならないことをした。

だが、そうしないで生きられなかった。それが、間違っていると知っ
ついても。

父が泣きながらも無理矢理に笑ったような気がした。

姉が抱きとめてくれたような気がした。

写真でしか見たことの無い母が、遠い向こうに見えた気がした。

——ごめん……父さん……姉さん……母さん……

間違った道を選んだ。

そうやって生きてしまった。

けれどジンに、後悔は無かった。

そうしない自分などありえなかったから。

その終わりが永遠の無だとしても、ジンに後悔は無かった。

そして、ジンは絶命した。

——あいつは……死んだか……

地面に倒れたジンは、もう動いていなかった。

その死に顔は、安らかな笑顔だった。

——つか、やべえな、これ……

地面に倒れた荒上の腹部は、肉が裂け、骨が見えて、内臓が飛び出していた。

血が流れ出し、意識を奪っていく。

——まあ、人殺しのために生きてきたんだから、こんな終わりもありだけだよ……

荒上は途絶えそうになる意識をなんとか保ちながら、起き上がった。

こぼれ出る内臓を手で押さえる。だが、それでも血は溢れ出てしまう。

能力は使い果たしていた。拳銃で撃たれた時のように、焼いて傷を塞ぐ事はでき無い。

——けどまあ、一応、足掻くだけ足掻いてみるか……

この砂漠を越えた向こうに、天変地異が起きる前の機械が今でも使用可能な街があった。

そこまでたどり着けば、どうにか傷を治してもらえるかもしれない。

荒上はふらつきながら、歩いた。

視界は霞んでいた。耳はもう聞こえなくなっていた。

それでも荒上は歩く。

復讐を遂げた男は、砂漠の大地に血を垂れ流しながら歩く。

——しんどそうだなあ……

宿敵を殺したというのに、荒上に残っていたのは虚無感だった。

喜びなど一切無い。感動などどこにもない。

ただ、虚しい。

かつて全てを失い。

宿敵を殺し。

生きる意味がなくなり。

死にたくないと思っていたはずなのに。

そんな事はもう、どうでもよくなっていた。

ただただ、虚無感だけがあった。

——なんだこれ。わけわかんねえな、俺……

荒上は歩く。

ただ、その歩みには生きる意志が感じられなかった。

その歩みではるか遠くにある街にたどり着くには、数時間ではと

てもじゃないが無理そうだ。

——それにしても止まらねえな、血……

だが、荒上は後悔はしていなかった。

そうせずにはいられなかったから。

全てを奪われて、それをただ受け容れる事などできなかった。

復讐をしなければ気が済まなかった。

そうしない自分が許せなかった。

だから後悔は無い。

その果てが何も無い終わりだったとしても。

全てをなくした荒上は、だがそれでも歩く。

歩いていく。

これは二人の男の物語。

憎しみと怒りと復讐に身を投じた、二人の男の物語。

その物語は間違いから始まった。

その物語は全てを無くし、終わりを告げた。

傍から見れば、それは愚かな行為だろう。

未来を見据えず、ただ過去に縛られて生きる。

他人から見れば、それは無意味な行為だろう。

復讐を遂げても、なくなったものは帰ってきはしない。

だがそれは、本当に愚かだったのだろうか。

だがそれは、本当に無意味だったのだろうか。

少なくとも二人はそう思っていなかった。

二人はそう感じていなかった。

それが例え何も残らない結末だったとしても。

二人の男に後悔は無かった。

これは二人の男の物語。

その愚かな行為を、

その無意味な行為を、

その殺し合いという行為を、

そうしなければ生きていけなかった、

二人の男の男の物語。

10 (後書き)

11 あとがき

本当は「後書き」欄があるんですが、こっちに書く事にしました。だって嬉しいんだもの！本当に書きたかったから！

これまでこの「小説家になろう」以外でもいくつか小説を書いてきましたが、まともに完結したのはこれが初めてです。

まあ、最初からクライマックスだったから、終わらない方がおかしいんですけどね。

一応、前日談って奴から書いていたので、気持ち的には全21話くらいです。

でも、前日談は雑であまり面白くないのでアレですが。

この対決が書きたくて、しょうがなく書いていた感バリバリです。

こっちはかなりしっかり書けたと思ってます。

書いてて楽しかったです。本当に。

まあ、同じ表現何度も使ってしまったてゐるんですが。

殺すだの死ねだの連呼しまくりですし。

でも、自分的には納得できる出来だと思えます。

え、気のせい？

まあ、そんな気がしなくもないです。

書き終わった後なんでテンション上がってるんですよ。

あと、かなり個人的なことです。荒上よりもジンの方が書きやすかったです。

荒上には家族を殺された以外の背景はなかったけれど、ジンは色々といじめやすかったのだ。

俺は熱血モノが大好きですが（一応、この小説のコンセプトは熱血バトルでした）、かなりひねくれているので、ジンを相当悲惨な目にあわせたと思います。

感想あったらお願いします。発狂します。

評価とか付けてくれたら嬉しいです。大歓喜です。

駄文でしたが、最後まで読んでくださってありがとうございます。た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676t/>

愚かで無意味な殺し合い

2011年5月25日15時40分発行